

親鸞の入信期に就て

安 井 廣 度

序

聖人は何時頃弘願の信心を獲られたのであらうか。御本書の後序に依ると二十九歳吉水入室の歳なるが如く、同じく三願轉入の文に依ると入室後淨土の要門から眞門にすゝみ更に眞門から弘願に轉入されたるが如く、又、覺師の親鸞傳繪に依ると吉水入室の際聖道門から直に弘願に入られたるが如く、後序に依ると要門から弘願へ、三願轉入の文に依ると要眞弘の三門を漸次に經過せられたるが如く、入信の時期も過程も判然せないのである。それで古來學者は種々の説をなして、或は吉水入室の時聖道門から淨土の要門に入り後漸次に眞門弘願へ轉入されたとし(一)、或は山上を聖道門と要門の時代入室を眞門としてその後眞門から弘願に入られたとし(二)、或は入室を弘願として聖道門と要眞二門は山上に於て次第に經過されたとし(三)、或は三願轉入の文を入信の過程を告白したものどせず義類の次第を説いたものとして之を除き、後序に依て山上を聖道門と要門、入室を弘願とし、或は傳繪に依て入室の時聖道門から直に弘願に入られたやうに考へ(四)、細かに尋ねる

と十餘説にも及ぶのである。然るに、此等の説を通覽すると、(一)と(二)は三願轉入の文に依て後序と傳繪を顧みざるもの、如く、(三)は兩者の會通に苦み、(四)はその會通に疲れた結果三願轉入の文を義類の次第を説くものと見たやうで、何れの説も充分でないのである。

しかし、この問題は聖人研究の基點であるばかりでなく、延いては聖人と恩師法然聖人との交渉その他にも關係する所が多いのであるから、何よりも先づ此點を判明しておきたいと思ふ。又、私は聖人の内生活を年代的に考へ信境の展開した跡を明にしたいと思つてゐるから、特に此問題に關する愚見を披瀝して學者の示教を願ふ次第である。

さて、私は山上を聖道門より要門要門より眞門の時代とし吉水入室の歲に弘願へ轉入されたとするので(三)説と結論に於て粗々一致してゐる。しかし、傳繪を傍にして後序の文に立脚すると、三願轉入の文を解説する上に異なるものがあり、又、本問題に關する種々の疑問に觸れて可なり詳密に之をまとめんとした所に多少の勞があるのである。

後序の文の檢討

然、愚禿釋鸞、建仁辛酉曆、棄難行兮歸本願^一。

御本書に三序ある中、總序は三經七祖に依て眞實の四法を明し、信卷の別序は鸞導二師に依て信別開の意味を述べ、後序は恩師法然聖人に依て眞宗の附法を明し御本書撰集の志を述べ給へること

は、先輩の既に注意した所で、かうした點から恩師の十三回忌を記念せんがために御本書を撰集されたといふことも興味ある考である。それはとにかく、佛德讃嘆を自分の任として私生活に就ては殆んど筆をとられなかつた聖人が今吉水時代を回想して、悲喜の涙に咽びながら、先づ承元の法難を叙して恩師との生別死別を偲び、次に相承の領解を述べて入室を記念し、選擇相傳と眞影恩寫を委説して恩師の殊遇を喜んでゐられるのはヨク／＼のことで、かうした後序全體の體裁から見ても私は充分に吉水入室弘願の意味を直觀するのである。殊に此等の記事を結んで是專念正業之德也是決定往生之徵也といひ、眞宗の附法を喜んで樹心弘誓之佛地等といふは、雜行すてゝ本願に歸し給へるすがたを再説したもので、純眞な弘願の行者であつたことを自ら物語るものであるのである。されば、別に説明を要せぬことでもあるが、特に後序の文を檢討して重ねてその事實を證したいと思ふ。

さて此文に就て先づ注意すべきは他に類文のないことで、之を法然聖人の教化に徴しても又我が聖人の著述につくも、かうした言葉はどこにも見當らないのである。しかも、前後の句が對をなさぬので、雜行すてゝといへば正行に歸すとか念佛に歸すとかいはねばならず、本願に歸すといふは本願の行(念佛)に歸することではあるが、本願に歸すといふ限りは自力の心をすてゝとか我が計ひをすてゝとかいはねばならぬので、前後の句がどうもうまく合はぬのである。更に内容的にいふと、

之を法然聖人の教化を代表する選擇集の總結の文に對照すると、雜行すてゝといふ丈では助業を傍にして正定を専らにする意味が残るやうであり、聖人の已證（御本書特に化卷）から顧みると雜修や雜心が残るやうであり、又、本願に歸すといふ句も、法然上人の教化からいふと本願の行に歸すと記されそうな所で、まことにかわつた言葉であるのである。しかし、深く考へてみると、こゝに師資相承の苦心が含まれ、入室當時の聖人の領解——しかもそれは生涯に一貫する——が偲ばれるので、まことに大切な文である。さればにや、蓮如上人は深く此文に着眼して「雜行すてゝ彌陀をたのむ」といふ教化をされたので、私はこゝに三祖一轍の機微をも窺ふのである。以下此等の項目を釋明しつゝ聖人の領解（此文の意味）を明にして吉水入室弘願の説を斷定せやう。

第一。難行すてゝといふ丈では助業が残らうといふ疑問に就て、石泉は雜行をすてゝ工合に巧拙を分ち、此文を選擇集二行章の廻向不廻向對と會合して本願に歸するは本願力の廻向に歸する意味なりとし、この廻向といふことに氣づかないものは、雜行をすてゝ方が拙くして、雜行をすてゝもまた助業をつかむのである、然るに、聖人はこの廻向といふことに氣づかれたから巧に雜行をすてられたので、巧に雜行をすてゝる者は、雜行の行體をすつると共に、之に伴ふ自力廻向の心をするので自ら助業を手放しにするといふのである。（御本書隨聞記）之はまことに行き届いた解釋で、古來選擇集の二行章を講ずる學者は何れも廻向不廻向對の文に注意して、之を他力廻向の宗義

の據とし、この廻向に氣づくものは助業をも正業（念佛）をつかむ心をもすてるといふのである。そこまで詳しくいはずとも、本願に歸するは本願の行に歸することであるから、こゝに自ら傍助專正の意味あるべく、此文のすぐ次に專念正業之徳といへるにその事實を確め得るのである。しかし、石泉が雜行をすてゐる工合に巧拙を分けたのは、雜行の行者（要門）が弘願に入る場合にいはるべきことで、眞門から弘願に入るものには適合せないのである。果然彼は三願轉入の文を寄顯の説として之を除き、此文に依て聖人を要門から弘願に入つた人と見てゐるやうである。しかし、此説は到底肯ひ難いので、聖人を三願轉入の人とすると、此句はもう少し別に解釋せねばならない。

然らば如何に解すべきかといふに、此文は相承の領解を述べたものであるから、恐らく法然聖人の教化、選擇集の總結の文の如きをコンデンスしたものと考へられるので、「雜行すてゝ」の一句は、聖道門を闊きて淨土門に入れるこゝ、更に雜行を抛ちて正行に歸せることゝを示し、しかし、雜行すてゝ正行に歸すと記しては適當でないし、更に助業を傍にして正定を專とすと記しても、もうひとつしつくりせぬので、直に「本願に歸す」といふ一句を點じて依佛本願故の微意をあらはし、相承の領解を氣持よく告白されたものと思はれるのである。まことに前後の句が對をなさぬ所に妙味があるので、師の聖人の教化を的傳しつゝ、他に類例なき文を以てその領解を表示せられたのであつた。（第三參照）

又、かういふ意味もあるやうである。雜行すてゝこのみ記して助業を傍にすといはれなかつたのは、助業に眞假相通の意味があるためで、しかも、雜行すてゝといふ行がかりの句と本願に歸すといふ信がかりの句と對にされたのは、師の聖人がかりの化風に卽して信がかりの化意をつかまれた苦心の記録とも窺はれるのである。

第二。聖人の已證から顧みると、雜行すてゝといふ丈では雜修や雜心が残らうといふ疑問に就ては、信力の増上信境の展開といふことに注意すれば直に解決が出来るので、二十九歳吉水入室の時にはまだ雜行雜修雜心といふやうな精細な分析も批判もなかつたのであらうから、又、師の聖人にもそうした教化がなかつたから、そうした表示をされなかつたので、入室當時の領解としてそれは寧ろ當然なことであるのである。しかし、當時猶自力の心があつたといふのではなく、その旨は次の本願に歸すといふ一句で了解されるのである。

第三。さて、聖人は何故に本願の行に歸すといはずに直に本願に歸すと申されたのであらうか、これこそ聖人入信の苦心を物語る、又、相承の微意を表示する最も重要な點であるのである。もと法然聖人のすゝめられた念佛は通途の念佛ではなくして廢立意にたつ專修念佛であり選擇本願の念佛であつたのである。若しそれが通途の念佛であつたならば、當時多くの念佛者がゐたのであるから南北の迫害は起らなかつたのである。然るに、法然聖人の門下で美しく此旨を領解した人は少く、

多くは念佛は選擇本願の行であるから之を修めさへすれば救はれてゆくと本願の行を自行の如く心得、稱へればたすかと領解したのである。念佛の行者に九品を分ちて九品の淨土を期するが如きは其の好例である。しかし、かゝる人々は終日念佛しても諸行の行者と其實を同じくするので所謂半自力半他力の念佛者である。聖人のたまふ「他力中の自力」の行者である。半他力半自力とか他力中の自力とかいふ事は一般に解されやすいのであるが、切言すれば他力の假面をかぶつた自力の領解に外なく決して佛の本願には相應せないものである。後の三願轉入の文から顧みると、聖人も曾てこの心境に住し給へるが如く、その破綻に行き詰つて吉水の會下に投せられたのである。然らば、聖人は師教の何れに感激し何れから救はれ給ふたのであるが、實にそれは如來の選擇の願心であつたのである。本願の念佛に歸するは本願に歸して念佛するのである。(御本書御自釋九布)自力の計ひをすて本願に凡てを打ち任せて喜ぶのである。切言すると、本願それ丈に生きる時に往生を決定するのであると、斯く聖人は領解されたので、その事は高僧和讃と正信偈の源空章を見ればわかるのである。即ち「本師源空世にいで、弘願の一乘ひろめつ、」「淨土眞宗をひらきつ、選擇本願のべたまふ」と念佛の二字を略して直に本願を擧示し、それを承けて「無上の信心おしへてぞ涅槃のかごをばひらきける」と讃へ給ふは(正信偈も同じ)この意味であつて、念佛爲本に即する信心爲本の領解は實にこゝに根據するのである。——往生の語を用ひず涅槃の語を用ひ給ふ所にも深い用意がある——

まことに聖人は如來の本願に眼を開けた人で、この信心は生涯に一貫して毫もかはらず益々その色を増したので、「歸本願」の一句こそ實に血のしたゝる聖人の叫であつたのである。されば、聖人は本願の語を殆んどすべて第十八願の意味に使用し、語そのものにも非常の力をこめられたので、吉水入室弘願の意味は此文に好くあらはたてゐるのである。(佳田智見師「教行信證流通分管癡」)

その他、吉水入室の絶待的であつたことは、御消息等にあらはるゝ師の聖人に對する深い憧憬からでも直感されるので、殊に注意すべきは内室惠信尼の消息である。

ほうれん上人にあひまいらせて、又、六かくたうに百目こもらせ給て候けるやうに、又百か目、ふるにもてるにも、いかなるたい事にもまいりてありしに、たゞこせの事は、よき人にもあしきにも、おなじやうに、しやうじいつへきみちなは、たゞ一すちにおほせられ候しな、うけ給はりさだめて候しかば、しやうにんのわたらせ給はんところは、人はいかにも申せ、たゞひあくたうにわたらせ給へしと申すとも、せゝしやう／＼にもまよいければこそありけめまで、おもひまいらするみなればとやう／＼に人の申候し時もおほせ候しなり。

こゝに「やう／＼に人の申候し時もおほせ候しなり」といふは種々に考へられるので(拙著「親鸞聖人と惠信尼の面影」)淨土教に就て彼此議する者がある時、聖人はいつも相承の領解を告白されたので、之を見ても聖人の確信を知り得べく歎異鈔第二章執持鈔第二章と侍せて吉水入室弘願の心持を知ることが出来るのである。

三願轉入の文の検討

是以願禿釋鸞、仰論主解義依宗師勸化、久出萬行諸善之假門、永離雙樹林下之往生、回入

善本德本眞門「偏發難思往生之心、然今特出方便眞門轉入選擇願海速離難思往生之心欲遂難思議往生果遂之誓良由由哉。爰久入願海深知佛恩爲報謝至德、眞宗簡要、恒常稱念不可思海德海、彌喜愛斯特頂戴斯也。

三願轉入の文は、その文だけ切り離して讀むとよくわかるが、後序の文や傳繪に對照するとわかりにくくなるので、古來その解説に苦み、中には會通に疲れて手を引いた學者さへある。さうでなくとも、恐らく凡ての學者は自説を發表しつゝ猶一抹の不安を感じたらしくそれ程に難解の文であるのである。それで一字一句に注意しつゝ靜にその意味を考へてみやう。

先づ「是以」といふは、教卷已來をすべて承けつゝ直接には化卷の全體に第廿願意を承くるものゝ如く、聖人自ら自身の入信過程を述べつゝ果遂の願益を喜び、深く佛恩を知つて御本書撰述の已むに已まれぬ志を披瀝したものゝ如く思はれる。

次に、「仰論主解義依宗師勸化」といふは何人の教をさし、又、何時頃そうした義に接せられたのであらうか。此は三願轉入の意味と事實とを解説するに就て根本的な問題である。先づ論主と宗師に就て、或學者は上二祖（龍樹天親）を論主、下五祖（曇鸞道綽善導源信源空）を宗師として茲に三國七祖の教化を凡て見やうとしてゐるが、龍樹を論主と稱する例はないし、かう打ちつけにいつては言葉の影が薄くなつておちつかぬ。それで、聖人の用語例に注意してみると、論主の語は天親に限

られ、宗師の語は廣く七祖等に用ゆるが、善導を呼ぶ場合が多く、又、折々曇鸞に使はれてゐる。又、三々の法門は七祖の中特に天親曇鸞と善導の思想に負ふ所が多いのであるから、こゝに論主といふは天親を指し兼ねて曇鸞を含み、宗師は善導を指したのではなからうかと思ふ。それは御本書の廣略二本を對照すると、廣本では三經一心の義を「四依弘經の大士三朝淨土の宗師」即ち七祖の功とするに對して、略本では之を論家（天親）と宗師（善導）の功に歸してゐるからである。

さて、聖人は何頃論主の解義や宗師の勸化に接せられたのであらうか、古來餘り注意せぬのであるが此は大切なことである。求道心の深い聖人のことであるから山上生活の間にすでに多くの聖教を播かれたことであらう。又、源信は叡山淨土教の巨人で、爾來淨土教は山上にも山下にも廣く行はれてゐるし、又、法然聖人の開教も已に年久しいことであるから、夫等を通じて早く七祖に親み論主や宗師の教化に接せられたことと思はれる。しかし、山上では信仰が得られず、吉水に入室して入信されたのであるから、嚴格にいふと、入室の後あらたに信眼を以て此等の人々に接し、相當の年月を経過して此等の人々の裡に淨土眞宗の内在することを看破し、七祖を大成して淨土眞宗を建立し御本書を撰述されたやうである。此は聖人の御名からも察せられるので、廿九歳の時、師の聖人から綽空といふ御名をもらはれたのは師の聖人と道綽の風格を傳へ、夢告に依て三十歳から善信と名のられたのは善導と源信とを思はせ、北越謫居已後親鸞と名のられたのは既に天親と曇鸞に

師事されたことを物語るので、主なる人々に就いていへば、廿九歳の時先づ師の聖人に會ひ、それから師の師である善導(宗師)の勸化に親み、つゞいて天親(論主)の解義——それは恩師とは餘り交渉のなかつた——と曇鸞の教化を味はれたのであつた。

しかし、こゝが六ヶしい所で、若し右に申すが如く、聖人は吉水入室の後宗師にゆき論主に親み、そうして三々の法門三願轉入の理を已證されたとするならば、「仰論主解義依宗師勸化」といふ句は次下の文とどういふ風に連絡せしめてゆくか。茲に於て私は前掲の(一)説と(二)説を思出すので、

(一)説は吉水入室を要門として、それから論主の解義を仰ぎ宗師の勸化に依て要門より眞門に入り、今特に眞門を出で、弘願に轉入したといふのであるから、此説は此文に尤も親しいやうである。又、

(二)説は入室を眞門として、それから論主の解義を仰ぎ宗師の勸化に依て今特に眞門を出で、弘願に轉入したといふのであるから、此句を「然今特」の句にかければ(一)説のやうにすら／＼と讀めな

くても一往領解されるのである。殊に「然今特」の文字は弘願轉入の時期を示すが如く、今といふは此文を認めてをられる時より餘りに隔たらぬことであらうかして、御本書の撰述より少し前頃に弘願に轉入されたやうにも思はれるのである。それで、或學者は下に釋明する惠信尼の消息に依て弘願轉入を聖人四十五歳佐貫住居の頃と考へ、或學者はこの消息から御本書を五十九歳已後の撰述とし、弘願轉入の時期を非常に晚く見てゐるのである。しかし、それでは傳繪はとにかく後序の文が

通れないである。然らば、吉水入室を弘願とする場合此文は如何に解釋さるべきであらうか。

先づ「然今特」の文字は年代を指示したのではなく弘願轉入の心持を極く端的に現實的にあらはしたものであるかと思ふ。それは此文の中にかうした類語が數多く出て凡て非常に力強く書かれてゐるのと、「今」といふ語は時間よりも感激をあらはす場合に多く使用されてゐるからである。一例を出す、總序に「難値今得値難聞已得聞」といへるは、今も已も大差なく、兩者共に年代の指示よりも遇法の感激を漏してゐるのである。

次に、「仰論主解義依宗師勸化」といふは、三願轉入の理は此等の人々の教化に依て已證されたのであるから依る所を明にしたので、(一)説のやうにそのまゝ次の句に結びつけてはならぬ。即ち、此等の人々の教化に依て三願を轉入したといふのではなく、その教化から回想しその教化に依て考へてみるに、自分自身がそいふ經路をふんできた、大體そいふ風にすゝんで來たと告白されたのではなからうか。譬へば、旅行から歸つて後、その地方の事情に委しい人から種々細かい話をきいて旅途を明にするやうに、入室の後、論主の解弟を仰ぎ宗師の勸化をきき、或は同門の友と信仰を談じ、多くの求道者に接し、或は北越に謫居して思索をつづけ、三願轉入の理を已證して昔を回想すると、要門を出で、眞門に滯着してゐたことや、師の聖人から弘願の一乘を聞いて無上の信心を發起したことなどがまぎ／＼と思ひ出されるので、その過程を現實的に端的に告白して果遂の願

益を喜び、教卷已來近くは化卷全體特に二十願の意味を結ばれたのであらうと窺ふのである。又、次に「久入願海深知佛恩」といふは、すぐ前の「選擇願海」といふ句を承けたのであらうからして、吉水入室を弘願としてのみ初めて「久入」の語が通暢し、又、深知佛恩……彌喜受斯といふ句も信力増上の姿として殊に意味深く讀まれるのである。

それから傳繪は聖淨相對の立場から認めたので、必ずしも聖人を直入の機としたのではなく、又「たちどころに」といふは下の「あくまで」に對するので、必ずしも卽座に入信されたといふことではなく、聖人の美しい領解を美しく書いたので、前に引用する惠信尼の消息に見ゆるが如く、聖人は百日間吉水に日參して入信されたのである。

然るに、こゝにかういふ疑問がある。聖人は吉水に於て要弘相對の法門を相承し、後之を細判して眞門を別開し要眞弘の法門を已證されたのであるから、山上生活に於ては眞門の體驗はなかつたやうに思はれると、しかし、之は傳繪の文がこびりつき、又、叡山の淨土教を要門位とする豫定觀念に煩はされてゐるので、求道の實際を見れば萬善諸行をすてゝ、念佛の一行を修め、定心の念佛や散心の念佛を自分の道とした人もあつたであらうし、現に師の聖人の如きも早く念佛の行者となられたが、選擇本願の念佛といふことに徹底されなんだ爲に深く惱まれたので、善導の一心專念彌陀名號の文に依て入信されたのは、念佛一行といふことよりも寧ろ順彼佛願故の文が肝に銘じ、こ

の二つは離れないが、選擇の願心に徹底して、そこに救ひを實證されたやうに思はれるのである。而して、法然聖人の傳道は已に年久しく我が聖人にさきだつて念佛の一行に入つた人も多くあつたのであるから、聖人が山上に於てそうした經驗を持たれなかつたとはいへないのである。又、六角堂夢想の内容は判然しないが、夢想に依て直に吉水にゆかれたことを思ふと、それ已前から師の聖人に就て相當の了解を持つてゐられたので、入室以前にも或は訪問されはしなかつたかと想ふのである。口傳鈔の説は直に用ひられぬが、聖光房東道の話の如きは偶然な一證據となりはしないか。少くとも此問題は五分々々で、決してさういふ經驗を持たれなかつたとはいへないのである。又、

二重對は本願非本願對で、非本願の諸行(要門)に對して直に本願の念佛(弘願)をすゝめ、自力の念佛は佛の本願に相應せないものであるから——さういふものはない筈のものであるから——之を別立せずして機の失を戒め、三重對は自力の念佛に滯るものゝ多きを顧みて之を別立し、佛の願意をたづねて要眞弘の三門を十九二十八の三願に配し、廣く機の失を與ふると共に願益の深きを示すので、大判細判の別はあるが、二重對に於て自力の念佛を認めないのではなく、もとより他力の念佛と同視するのでもなく、弘願の背景として何時の世にもそうした行者はあつたのであらうと思ふ。要之、後序の文は相承の領解を述べて入信を記念し、三願轉入の文は已證から昔を顧みて現實的に入信の過程を告白したので、兩者相待つて我々は聖人の内生活を明にするのである。更に後序の

「歸本願」の句と三願轉入文の「轉入選擇願海」の句と對照しても直に其意味を察することが出来るであらう。

助業の問題と果遂の願益に就て

山上を聖道門と要門の時代入室を眞門としてその後眞門から弘願に轉入されたといふ説に就ては詳しい發表がないから批評することが出来ぬが、多少想像を混へて理由らしきものを求めると次の四點に收まるやうである。

第一。吉水入室は確に大轉回期であつたに相違ない、しかし。漸く二十九歳の青年であらせられたのであるから、その頃に純眞な弘願の信心を獲られたとは思ひ難く、大體の安心は出來たとしても明に弘願を信せられたのは後年のことなるべく、そう見る方が宗教心理學的に自然だといふのである。

第二。法然聖人の念佛爲本と我が聖人の信心爲本には何か違つたものがある、此は彼より出で、しかも彼以上に深いものがある。かうした全體的な觀察から顧みると、吉水入室の際念佛門に入られたとはいへ、未だ眞の弘願に歸しておられたとは思へないといふのである。

しかし、斯かる考は凡て傍證に供ふべき性質のもので、それ自身に學的價值のないことは今更申すまでもない。但し此場合一言添へておくと、古來の宗教家は多く三十歳前後に入信してゐるので、

それまでに種々の葛藤を経て來てゐるのである。之を我が聖人に就ていふと、聖人は山上に於て聖道門を行じ淨土の要眞二門を経過し、吉水の會下に投じて極めて自然に弘願に轉入されたのである。又、第二の理由に就ては、恐らく領解(信心)と已證(信味)とを混雜してゐるので、兩祖の已證の相違する所を見て直に領解を共にするものゝ如く速斷するのであらう。(又、この小篇の目的とするところは、客觀的に兩祖の領解の異同を批判せんとするのではなく、我が聖人の意中にたつて入信の時期を定めんとするので、この意味に於て、我が聖人は明に恩師の上に弘願の一乘を認め、吉水入室の頃之を聞いて無上の信心を獲られたのであつた。)

第三。口傳鈔や惠信尼の消息を見ると、聖人は東國化導の頃三部經の千部讀誦を發願し助業を勵んでおられるから、その頃までは未だ弘願の行者と見ることが出来ないといふのである。之に就ては一往の釋明を要するから、左にその全文を引用して意の存する所を明にしておかう。

ぜんしんの御房

くわんき三年四月十四日、むまの時ばかりより、かざ心ちすしおほえて、そのゆぶざりより、ふして、大事におはしますに、こしひざなもうたせず、てんせい、かんびやう人をもよせず、たゞおさませずして、ふしておはしませば、御身をさぐれば、あたかなる事火のごとし、かしろのうたせ給事もなのめならず、さて、ふして四日さ申あか月、くるしきに、まはさてあらんさおほせらるれば、なにござぞ、たわごさゝにや申事候さ申せば、たわごさにてもなし、ふして二日さ申日より、大きやうなよむ事ひまもなし、たまゝめなふさげば、きやうのもんじの、一時ものこらず、きらゝかに、つぶさにみゆる也。さて、これこそ心へぬ事なれ、念佛の信じんよりほかには、なにござか心にかゝるべきと思て、よくゝあんじてみれば、この十七八ねんがそのかみ、げにゝしく三ぶきやうな、せんぶよみて、すざうりやくのためにて、よみはじめてありしを、これはなにござぞ

じしんけう人しんなんちうこんきやうなむさて、身づから信じ、人をおしへて信ぜしむる事、まことの佛おんをむくぬたてまつるものと信じながら、みやうがうのほかに、なにごとのふそくにて、かならず、きやうをよまんとするやと思かへして、よまざりしことの、されば、なほもすこしのころのありけるや、人のしうしん、じりきのしんは、よく／＼しりよあるべしと、おもかなしてのちは、きやうよむことはさまりぬ。さて、ふして四日と申あか月、まはさてあらんとは申也とおほせられて、やがて、あせたりてよくならせ給て候し也。三ぶきやう、げに／＼しく千ふよまんと候し事は、しんれんぼうの四のさし、むさしのくにやらん、かんづけのくにやらん、さぬきと申すところにてよみはじめて、四五日ばかりありて思かへして、よませ給はで、ひたちへおはしまして候しなり。しんれんぼうは日つじのさし三月三日のひにむまれて候しかば、こそしは五十三やらんぞおほえ候。

こうちやう三ねん二月十日

惠 信

惠信尼は京の彌女から聖人の訃報を聞いて往事を回想しつゝ、吉水入室と下妻の夢想と此事を認めて彌女に送られたので、この三つは惠信尼に取つて尤も忘れ難いことであり、又こゝに聖人の面影が好くあらはれてゐるから、この三つは何れも重大な事蹟であつたことは申すまでもない。そこで、論者は此消息に依て、聖人はこのやうに助業(轉經)を勵み、人の執心自力の心の執拗さに驚いてゐられるから、少くとも東國時代の初頃までは自力の計ひが失せず弘願の信心には入りきらずにおられたといふのである。しかし、此は甚だ粗雑な見方で、聖人がげに／＼しく三部經の千部讀誦を思ひたゝれたのは、自行のためではなくして衆生利益のためであり、往生のためではなくして佛恩報酬のためであつたのであるから、所謂「助正兼行の雜修」でもなく、又、「助正間雜の心」があつてのことでもなく、私は茲に却て聖人の内生活の深さを偲ぶのである。聖人は夙に善導に依て教化

の本義を明め、自信教人信より他に道なきことを會得しながら、教化に燃ゆる餘り轉經といふやうな時代的な形式的な方法を選ばれたので、そこに悲しい躓きがあつた、しかし、それは四五日で中止されたのである。然るに、十七八年の後再びさういふ幻覺が現れたため、聖人は驚いて人の執心自力の心の執拗さを反省されたので、茲に内生活の純化に専念し給ふ姿が尊くも見えるのである。念佛の行者だとして凡夫人であり時代人である限り、凡夫的な時代的な躓きは免れないので、斯かる場合に聖人の如く強く起ちあがる所に尊さがあるのである。又、惠信尼が此事をかき送られた心持を考へてみても、すでに吉水入室前後の模様を記して聖人の領解を示し、しかも事に觸れ縁に觸れて度々その領解を門弟や信徒に披瀝されたことまで注意してゐられるのであるから、其喜の反省は決してその領解を裏ぎるやうな出來事とは思へないので、教化問題に就て一段の考慮を費し、どこまでも信後の惑ひに打勝ち時代を超えてゆかうとする聖人の純な心持を示したものと考へられるのである。又、論者はこゝに「人の執心自力の心はよく／＼思慮あるべし」といふ句に煩はされてゐるやうであるが、もと人の執心と自力の心とは似て非なるのもので、聖人の轉經は人の執心ではあるが自力の心ではないのである。尤も私はかういふ風に生ける宗教生活を分別することを好むものではない。又、眞宗の學者に往々かういふ弊のあることも得心してゐる。しかし、人の執心と自力の心とを混亂するは聖人の教義そのものを覆すので、之から考へても此句は人の執心に因んで自力の

心の執拗さを思慮されたので、自力の計ひから轉經を試み、自力心の餘習を反省されたことではないのである。尤もこの二つの心持を判然分ける時に、往々人の執心を肯定するやうな弊に陥るものもあるべく、この意味に於て、人の執心自力の心と打つゝけに認めてある所に生き／＼した心持が直感されるのでもある。史に徴すると、聖人は三十九歳の冬に流罪赦免の令を受け、翌年の春頃恩師の御往生を知られたやうであるから、恰度親に別れた子が涙を拭ひつゝこれからは獨立するのだと起ちあがるやうに、謫居五年間の沈黙は破れて聖人の傳道時代はそれより初まるが如く、佐貫に於ける轉經はその深い熱を偲ばしめられるのである。しかも、聖人は猶時代の衣をぬぎゝらずにやることを省みて之を中止し、今更にその餘習に驚いて人の執心を省み自力心の根強さを回想して彌々信力の増上を實證し給ふ。私は吉水の入室に依て聖人の領解を知り、其喜の反省に依てその領解の常に躍動する一面を知るので、之を以て弘願未入の證とするは他力信心そのものゝ意義に味いためだと思ふ。

第四、聖人は淨土和讃に果遂の願益を述べて、「定散自力の稱名は、果遂の誓に歸してこそ、おしへざれども自然に、眞如の門に轉入する」と歌つておられる。この和讃に依ると、眞門の行者は別に教へなくとも念佛それ自らのほたらきで自然に聞處に至り、果遂の願益に計らはれて自然に弘願（眞如門）に轉入するものゝ如くある。それで、この和讃を三願轉入の文の「果遂之誓良有由哉」とい

ふは句に結びつけると、吉水入室は全く法然聖人の教に依つたのであるから眞門なるが如く、その後別に教を受けずして自然に弘願に轉入されたやうにも考へられるのである。しかし、先輩もすでに注意されたやうに、「おしへざれども」といふは「たとひ教へるものがなくとも」といふ意味で、（香月院「淨土和讃講義」）善知識の教を不用とするのではなく、又、多くの場合その教示をうけて入信するので、我が聖人の如きも聞法を以て始終せられたのであるから、之は事實を誣いた又一概な考といはねばならぬ。

思ふに、此等も信境展開の一斷面を記したもので、聖人は本願の深意を味へば味ふ程佛智を疑ひし罪の深きことを回想して「佛智うたがふつみふかし、この心おもひしるならば、くゆるこゝろをむねとして、佛智の不思議をたのむべし」と諭し、又、法は常にそれ自らはたらく所以を觀じては「信心のひとにおとらじと、疑心自力の行者も、如來大悲の恩（果遂の願益）をしり、稱名念佛はげむべし」と勧められたので、この和讃も晩年に於ける聖人の已證をかゝれたものと了解されるのである。何となれば、もとの結句は、善導の般舟讃に淨土の證を讃嘆して不覺轉入眞如門といへるに據つたもので、御本書の行卷には此句の前後十句ばかりを一連に引いて他力念佛の德を讃へ、今はこの一句を以て自力念佛の德をあらはし果遂の願益を讃へておられるので、同じ願でもその意味はそれぐに違つてゐるからである——我々はかうした點から聖人の信境展開を跡づけることが出来る

——それを同じ聖人の言葉だといつて何時も一つに見やうとするが間違ひで、この結句でも行卷のそれは果遂の願益に關係なく、御本書撰述の頃は單に願益の深きことを已證し、晩年に到つて此結句を願益の裡に味ひ右の和讃を歌はれたものと思ふ。

それで、この和讃は先輩の説のやうに解釋すべきものかどうか猶研究の餘地があるので、思ふに、行卷のそれは、他力の念佛者は教へざれども自然に眞如の門（頓悟の理）に轉入するといふ意味なるべく（六要會本二ノ四六）和讃のそれは教化の功を忘れて只管に果遂の願益を味ひ給ふ意味かとも窺ふのである。教化の問題は常に聖人の胸裡に往來したるが如く、愚禿悲歎述懷には「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ、如來の願船いまさずば、苦海をいかでかねたるべき」とまで申してをられる。こざかしい世話は止めやう、教へざれども果遂の願に計れて自然に眞如の門（弘願）に轉入するとかういふ意味を歌はれたのではなからうか。上來、吉水入室眞門の説を支持するが如き二三の疑問を釋明し終る。

結

最後に聖人が山上に於て聖道門を修行せられたことは直接の文獻はないが、比叡山が天台宗の本寺であつたこと、正像末和讃等に聖道の難證を告白し給へること、覺存二師がそれを傳へてをられることから知られるので、今までの叙述をまとめると、先づ山上に於て聖道門を修め、次で淨土の

要門に入り更に眞門にすゝみ、夫等の行き方がすべて破綻して六角堂の參籠となり、終に宿縁深くして吉水の聖人に謁し始めて弘願の信心に轉入せられたのである。尤も之は論主の解義を仰ぎ宗師の勸化に依て生れたる聖人の已證からその昔を回想して、その事實を確め特に果遂の願益を喜ばれたので、入室の當時にそうした詳しい批判や述懐があつたといふのではない。この意味に於て、難行すてゝ本願に歸すといふ後序の文は相承の領解を端的に表示した。しかも、生涯に一貫し潜流する聖人の領解そのものといひ得べく、其喜の反省には信境展開の一斷面としてまた教へらるゝ所が多いのである。(昭和五、一、七)